



はじめての練習試合

《明日は勝とうぜ。》

ぼくは、野球部の仁史ひとしたちやクラスの数名に声をかけてSNS*1のグループチャット*2を始めた。今では多くの同級生が、ぼくたちのグループに入っている。

明日は、新チームになって初めての練習試合がある。ぼくは、緊張と興奮の中で、試合にかける意気込みをグループに向けて書き込んだ。すると、

《公一、がんばれよ。》《めざせ、初勝利。》《がんばろうぜ。》《勝てよ。》等、次々と同級生から書き込まれてきた。その中に、《体を張ってでも、ボールを止める。》

という仁史の書き込みがあった。仁史は、運動は得意ではないが、野球が大好きだ。中学生になって野球部に入り、いつも大きな声を出して練習に取り組んでいる。

試合は、緊張感ただよう中、接戦となった。ぼくたちは、エースの優介を中心に必死でプレーした。そして、ぼくたちのチームが対〇とリードして、いよいよ最終回を迎えた。優介は、かなり疲れているようだったが、最後の力を振り絞って力投し、二人を打ちとった。

(ランナー一、二塁か……。大丈夫だ、あと一つアウトをとるだけだ。)
優介は、渾身こんしんの直球を投げ込んだ。

「カキーン。」

大きく打ち上げられた打球は、仁史のところに飛んでいった。

(仁史、頼む……。)

しかし、仁史は、ボールを後ろにそらしてしまった。このエラーが原因で、相手に二点を奪われ、ぼくたちは試合に負けた。

(もう少しで勝てたのに、仁史がエラーをしなれば……。体を張ってでも、ボールを止めるんじゃないのかよ。)

試合後のミーティングで、顧問の先生の話を知っている仁史の顔が、なんだか笑っているように見えた。ぼくはさらに腹が立った。

家に帰っても腹立ちがおさまらず、ぼくは、勝手にSNSのグループから仁史を外した。

そして、《仁史の下手くそ。お前のせいで試合に負けたのに、ミーティングで笑ってんじゃねえぞ。腹が立つから、仁史をグループから外してやったぞ。》と、書き込んだ。すると、数名の部員たちが、《同感。負けたのは、仁史のせいだしな。》《本当に、小学生より下手くそだよな。反省しろよな。》と書き込んできた。この書き込みを見た他の部の同級生からも、《仁史、うざいな。》《野



球部のお荷物だな。》《グループから外されて当然。》等の書き込みがされていた。

数日後、久しぶりに部活動が休みになった。家でゆっくりしていると、優介から、

「ちよつと話がある。今からお前の家の近くの公園に出てこないか。」

と、電話があった。ぼくは、何だろうと思いつながら公園に向かった。優介は、ぼくの顔を見るなり、

「この前の試合、惜しかったな。」

と、話を切り出したので、ぼくは、少し興奮しながら、

「最終回、仁史がエラーしなきゃ勝ってたよな。あいつのせいで、おれたちの初めての試合が台無しだよ。」

試合後のミーティングでも笑ってたから、めっちゃむかついたよな。」

と、こたえた。すると優介は、おだやかな声で返してきた。

「そうかな。おれには、どうしていいのかわからないって顔に見えたけどな。」

「優介は、仁史に腹が立たないのか。」

「最初は腹が立ったけど、あいつを見ていたら、おれたちだって昔はこんな感じだったんじゃないかなって

思ってたんだ。」

ぼくが黙っていると、優介は話を続けた。

「ところで、一方的に仁史をSNSのグループから外して、悪口を書き込み始めたのは、お前だろう。その

後、野球部じゃないやつらも悪口を書き込んだらしいな。いくら腹が立っていたとしても、やり方が卑怯

だぞ。そんなことをしても、次の試合に勝てるわけないだろう。」

ぼくは、自分の顔が急に真っ赤になっていくのを感じた。そして、声を絞り出した。

「お前、どうしてそのことを知ってるんだよ。携帯電話をもってないのに。」

ぼくの動揺した姿を見て、優介はゆっくりと、

「昨日、仁史から野球部をやめたいって言われたんだ。その時に、グループチャットのことも聞いたんだよ。」

と、こたえた。グループの誰かが、書き込んだ内容を仁史に話したのだと思い、ぼくは言葉につまった。優介は、ぼくの顔を真っ直ぐ見て、

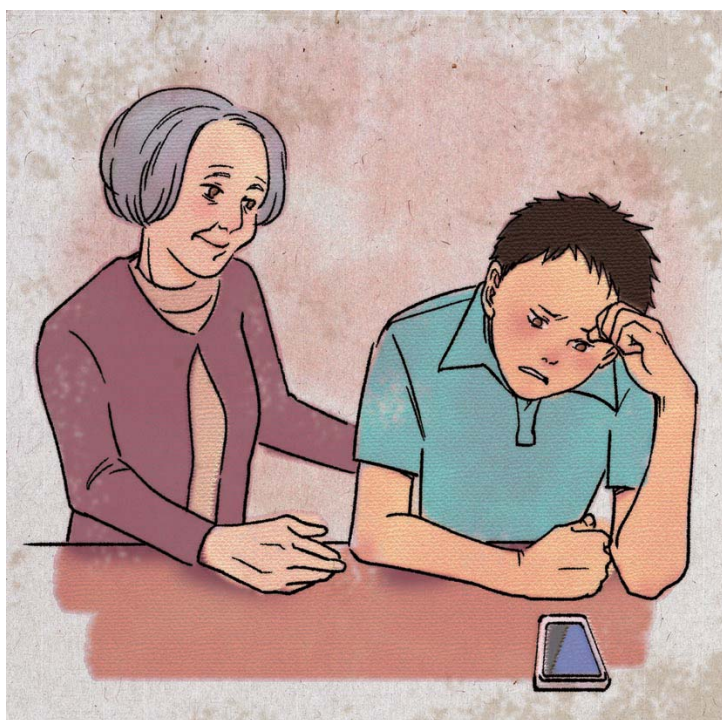
「あいつには、『お前、誰よりも野球が好きなんだろう。』って言ってやったんだ。」
と、強く言った。

公園から家に帰って、腕組みをしながら机の上に置いた携帯電話を見つめて座っていると、祖母が、

「公ちゃん、何か考えごとかな。」
と、聞いてきた。ぼくは、

「別に。」
と、素っ気なくこたえた。祖母は気にせず、机の上に置かれた携帯電話を見ながら、ぼくに優しく語りかけてきた。

「便利な時代になったね。おばあちゃんが若かった頃は、手紙で気持ちを伝えることが多かったんだよ。」
「ふうん。おばあちゃんも手紙を書いたの。」



「たくさん書いたよ。でも、本当に大切なことは、相手に会って伝えたかな。」
祖母の言葉を聞いて、ぼくは、じっとしていられなくなった。

「ちよつと出かけてくる。」

ぼくは、仁史の家に向かって無我夢中で走った。

仁史は、家の塀を使って、はね返ってくるボールを捕る練習をしていた。ぼくに気付いた仁史は、練習をやめてぼくが近づくのをじっと見ていた。

「仁史……。」

ぼくは、謝ろうと思ったけれど、仁史の顔を見ているとそれ以上言葉が続かなかった。

仁史は、

「公一、今からおれにノックしてくれよ。」

と、言って笑った。その言葉を聞いた瞬間、なぜかわからないけれど、ぐっと心に刺さるものがあった。

※注1 SNS・・・ソーシャルネットワークサービス。携帯電話、スマートフォン等を使って、友人・知人間のコミュニケーションを円滑にする手段や場を提供したり、趣味や居住地域、出身校あるいは「友人の友人」といったつながりを通じて新たな人間関係を構築したりする場を提供するサービスのこと。

※注2 チャット・・・コンピュータネットワーク上で、二人以上の相手とリアルタイムで短いメッセージをやりとりするシステム、またはサービスのこと。